

## 夕暮れの匂い

### 第一章：通学路の影

放課後の通学路は、春の終わりを告げる風にそよぐ桜の花びらが、少年・遥斗の足元でかすかに舞っていた。中学に入ったばかりの彼は、友達と別れた後、この道を一人で歩くのが習慣だった。新しい仲間との笑い声は心地よいが、心のどこかに引っかかる疼きがある。夕陽が傾くと、胸の奥に懐かしい匂いが蘇る。それは、甘く切ない記憶の残り香だ。

その日、電柱の影に立つ少女の姿が目に入った。長い髪が風に揺れ、白い首筋が夕陽に映える。遥斗の足が自然と止まる。

「あれは、彩乃姉ちゃん？」

幼馴染だった彩乃だ。昔は毎日一緒に遊んだ。川辺で彼女の細い指が石を投げる姿を眺めたり、夏の夜に一緒に花火をして、終わった後も火薬の匂いを嗅ぎながら並んで座ったり。でも、彩乃が高校生になり、遥斗も友達と過ごす時間が増えると、二人の距離は静かに開いていってしまった。

「彩乃姉ちゃん？」

声をかけた瞬間、彼女が振り返る。長いまつ毛が夕陽に透け、儂げな瞳が遥斗を捉えた。彩乃は一瞬驚き、それから柔らかく笑った。

「遥斗か。びっくりした。背、伸びたね」

その声は昔の優しさを保ちつつ、どこか疲れを帯びている。遥斗は彼女の顔をまじまじと見つめた。目尻に薄い影が落ち、制服のスカーフが少し乱れている。手に持つカバンは重たそうに下がり、指先が白くなるほど握り潰していた。